

生き物会議

龍郷町立大勝小学校 四年 徳永 瑛亮

ぼくが、学校から帰って、一人でゲームをしていると、ピンポンとチャイムが鳴った。

「だれかな。お母さんが帰ってくるには早すぎるなあ。」
と思いながら、ドアを開けると、だれもいなくて、大きな葉っぱが一枚落ちていた。よく見ると、何か書いてある。葉っぱには、『生き物会議を行います。あなたが代表で選ばれたので、ぜひ来てください。日時、あなたが行きたくなった時』と書いてあった。

「代表って何の代表かな。しかも、行きたくなった時ってどういうこと。」

とぼくは、不思議に思った。でも、ちよつときよう味がわいてきた。そのとたん、急に白いきりが出てきて、ぼくは思わず目をつぶった。目を開けると、知らない森の大きなガジュマルの木の下にいた。

びっくりしてまわりを見回すと、クワガタやタナガ、アマミノクロウサギなど、たくさんの生き物たちがいた。その時、

「静かに。今から『生き物会議』を始める。」
と低い声が聞こえた。見ると、そこには毛むくじやらの

不思議な生き物がいた。切りかぶのつくえには、『議長ケンムン』と書いた木の板があった。ぼくは、思わず、「ええつ。本当にケンムン。」

と声に出してしまった。すると、ケンムンは、「ようこそ生き物会議へ。人間の代表、瑛亮君。来てくれてありがとう。」

と言った。ぼくは、なにがどうなっているのかわげが分からなかった。

その時、クワガタが手を上げて話し出した。

「ぼくは、君に言いたいことがある。なぜ、ぼくたちをつかまえて、せまいはこに入れるんだ。ぼくたちは、森を自由に飛び回ることが好きなのに。」

ぼくは、びっくりした。いきなりクワガタが話し出したからだ。どきどきしながら、

「だって、クワガタですごくかっこいいし、持っている」と、友達に自まんできるし……。」

と言うと、クワガタは、

「ぼくたちは自まんされるために生まれてきたんじゃない。」

と言った。すると、次にタナガが話し始めた。

「そうだよ。この前は、ぼくたちの仲間をたくさんつかまえたくせに、ほとんど食べずに残したじゃないか。」
「だって、捕まえるのは楽しいけど、食べるのはあまり

すきじゃないし……。」

ぼくが、そう答えると、タナガは、

「そんなのひどい。命がむだじゃないか。」

と悲しそうに言った。

クロウサギも話し始めた。

「あなたたち人間が、ハブをへらすためにつれてきたマングースが、私たちの仲間をどんどん食べているのよ。どうしてくれるの。」

ぼくは、みんなからせめられて悲しくなった。でも、だんだん腹が立ってきた。

「なんで、そんなことぼくに言うんだよ。生き物をつかまえているのは、ぼくだけじゃないし。マングースとかは、昔の人がしたことだろ。ぼく、関係ないし。そんなの大人のえらい人たちに言えばいいじゃないか。」

すると、今までだまっていたケンムンがぼくに言った。

「たしかにそうじゃな。でも、こいつらの気持ちも少し分かってあげてほしい。」

そう言って、ぼくをじっと見た。そして、クワガタたちにはたずねた。

「おまえたちは、この子にどうしてほしいんじや。」

すると、みんなそれぞれに言い出した。

「ぼくたちクワガタの命を考えて、つかまえてほしい。」

そして、かうなら大事にかかってほしい。」

「ぼくたちタナガも生きている命だから、とった分はちゃんと食べてほしい。」

ぼくは、うなずいた。それならできそう。

さい後に、クロウサギが言った。

「わたしたちは、あなたたちに、マングースや自然のことをちゃんと考えてほしい。関係ないなんて言わないで。だってあなたたち子どもが、未来をつくるんですよ。だから、しょうたいじょうを送ったのよ。」

ぼくは、少しづつ生き物たちの気持ちがあがってきた。「分かった。ぼくも、できることをがんばる。」

そう言うと、ケンムンや他の生き物たちは、ありがとうと言うように、にこっと笑った。そのとたん、来たときと同じように、白いきりがぼくをおおった。

気がつくくと、ぼくは家の前にいた。夢だったのかな。でも、手には、もう一まいの葉っぱがあり、そこには『今日は、生き物会議に来てくれてありがとう。』と書いてあった。

ぼくは、虫かごの中のたくさんのクワガタを一匹だけにしようと、虫かごの方に走っていった。